

【郷土のはなし】

N I C ・玄梅正明

― 三丸露払いと日光の村の発祥 ―

その昔、大己貴命（オオナムチノミコト）が日光山（二荒山・男体山）に来た時、その露払いとして、松王丸・梅王丸・桜丸の三丸がきて日光山に永住し、松王丸は藪村（今の鉢石町）、桜丸は蓮華石村（今の花石町）、梅王丸は外山村（今の稲荷町）を賜り、子孫が代々百姓を業とした。

（外山村は、滝尾神社付近にあったが、1662（寛文2）年の稲荷川の大洪水で、目付代・田中高成をはじめ、同心10人、町人148人が死亡、流出家屋300軒余の大惨事が起きた）後に現在の地に稲荷神社の建立と稲荷町ができる。

後、二荒山神社の祭典（現・弥生祭）に各町で家体や花車（茶瓶）を操出すとき、この三町は松王丸、梅王丸、桜丸の三丸の子孫と言う訳で二十人位が一組となって「奴姿」で、家体の前を練り歩いた。これが人気を呼び明治の前まで続いたという。

日光の村の発祥が、花石村、鉢石村、稲荷村の三村であるという一つの伝説が残っている。



面影を残す奴姿と手古舞の行列
（神橋付近）

― 日光市山内の地名と他県の山内 ―

日光市街から見ると、こんもりとした丸い山が見えますが、この山を「恒霊山（恒例山）・こうれいざん」と呼び、緑の中に、日光東照宮・日光二荒山神社・日光山輪王寺の漆塗りの建造物が並び立っている。

世界遺産となった日光の社寺は、日光山内（にっこうさんない）や、二社一寺（にしゃいちじ）とも称され、山内とは、神社や寺院の敷地内を表し、寺内／山内／寺中／神域／神苑の共通する意味を持つそうです。

なので、日光東照宮、日光二荒山神社、日光山輪王寺の社務所や寺務所には日光市山内という地名が使われています。

（参考までに記す）山内の字がつく場所は全国で22カ所あるが、「さんない」と呼ぶところは、岩手県（軽米町）・秋田県（秋田市）・栃木県（日光市）の3県のみで、他の19県（市）は「やまうち」とか、「やまのうち」と呼んでいるそうです。

― 鳴虫山の伝承と伝説 ―

日光の歴史と共に幾星霜、日光開山の祖・勝道上人も歩いてきた鳴虫山（1104m）
ゆかりの伝承と伝説を紹介しましょう。

（その一）

先祖代々からの伝えで「この山に雲がかかると雨になると、日常生活に
欠かせない天気予報の役目を果たした的中率も高く誇っている。標高が曇天から
降雨に移行するまたとない目安らしく信頼も抜群だった。山の名の当て字は
子供が泣き出しそうな顔と、今にも降りだしそうなさまが似ているところか
ら泣虫が鳴虫に転じたと今に伝わる話である。

（その二）

日光二荒山神社のご神刀「衾々切丸・ねねきりまる」にまつわる「鳴虫山」の伝説が残っている。
遠い昔、日光の山中に「ネーネー」と鳴く怪しい化け物が出没し村人に危害を加えていた。村では
この妖怪を「衾々虫」と恐れていたが誰一人征伐する者が出てこなかった。そんなある日、いつも
のように村人を怖がらせていると、この大太刀がひとりでに鞘を払い拝殿を飛び出して衾々虫を追
いかけはじめた。衾々虫は棲家を飛び出し大谷川の向こう岸に追い詰められ日光山中の「ねねが沢」
で力尽き退治させられてしまった。以来この大太刀を「衾々切丸」、妖怪が棲んでいた山を「鳴虫山」
と名付けたという伝説が残っている。

日光二荒山神社では、毎年四月十三〜十七日にかけての弥生祭に、男体山麓の牡鹿の皮の上に重要
文化財の「瀬昇太刀」「柏太刀」「衾々切丸」の大太刀、三口を飾り立てて神に捧げる習わしがある。



二荒山神社三神輿（左から）

本宮神社（御子神・味耜高彥根命・太郎
山）

二荒山本社（主祭神・大己貴命・男体山）



神輿3 弥生祭りの際、鹿の皮の上に置かれた瀬昇太刀、柏太刀、衾々切丸

鹿の皮の上に置かれた

衾々切丸、瀬昇太刀、柏太刀の三刀
（二荒山神社発行・宝刀譜よりコピー）

・衾々（ねね）には諸説あるそうで、妖怪説、河童説、鶴が転じた説など様々である。日光付近の方言では、河童のこ
とを指す説もある。鶴（ぬえ）とは伝説上の妖力を持つ怪獣で、頭は猿、胴は狸、尾は蛇、手足は虎、声は鳥のトラツグ
ミに似るといわれる。また、人間に例えるとつかみどころのない正体不明のはっきりしない人物態度を指すという。



自宅から望む雪被る鳴虫山

― 牧水の歌碑 ―

鹿のゐていまもなくてふ下野の

なきむし山の峰のまどかさ

牧水

花石神社境内にある寛政年号の石鳥居の左に根府川石に刻まれた「歌人・若山牧水」の歌碑がある。昭和四十八年に清滝町の星野野一氏が建立したもので碑の高さ二m、幅九十cmある。

若山牧水先生は、大正十一年十月二十八日群馬県より金精峠を越えて日光町に足跡を印しました。湯元に一泊、中禅寺に一泊して三十日に馬返より電車に乗り窓から鳴虫山を眺め鹿の話など聞きながら板挽町（現・日光市匠町）の友人齋藤氏宅に二泊、その間、数首の秀歌を詠まれ、その一首がこの碑の歌です。自然を愛する心を養う様子がうかがえ、先生自筆のまま石に刻み、正面遥か前方にある鳴虫山を望むこの地に歌碑を建立しました。裏面には、当時の栃木県知事、横川信夫氏の書で歌碑の由来が刻まれている。

この碑の除幕には、昭和四十八年七月十五日、牧水の長男で、立川市在住の若山旅人氏、他牧水の弟子たちが集って盛大に行われたとある。ぜひ一度、立ち寄ってみてはいかがでしょうかでしょう。

そして、歴史古き花石神社（祭神・少彦名命（スクナヒコナノミコト）知恵の神）に参拝され御利益と、よき知恵を授かることをお勧めします。



鳴虫山と対峙して建つ若山牧水の歌碑

（花石神社境内）



牧水の歌碑表面



牧水の歌碑裏面

（歌碑は花石町自治会で管理しています。）